

未来へつなぐ 子どもと学ぶ

sign

サイン

No.10



特集

未来を生き抜く子どもたちの
力を伸ばす。

新しい文房具として 学校でも使う時代。

令和の文房具

富山市ではここ数年の間、子どもが使う文房具の仲間にタブレット端末が加わりました。

タブレット端末は、昨今の教育現場で注目されている「GIGAスクール構想」を支える重要なアイテムです。

多くの人が仕事や家庭など、社会のあらゆる場所でパソコンやスマートフォンを使っており、こうしたICT機器は日常に必要な不可欠なものとなっています。学校もその例外ではありません。

子どもたち一人ひとりがタブレット端末を使って、自分に合ったスタイルで学習を進め、これからの時代に取り残されないように自分自身の可能性を広げること。それがGIGAスクール構想の目的です。



イメージの具体化を探り、情報共有して話し合う生徒たち。

対話が生まれる学び

富山市がGIGAスクール構想推進モデル校として指定している上滝中学校の美術の授業「パッケージで地域の魅力を発信しよう!」を取材してきました。

取材当日、授業がはじまると、子どもたちは自分が考える富山の魅力について、早速タブレット端末に自分の意見を出し合っていました。学習の後半で制作するパッケージデザインのイメージを具体化させるためです。

こうした学習場面で、以前とは大きく異なる学習スタイルが生まれています。

イメージを具体化するため、これまでは資料集などを参考にしながらノートや紙の付箋を用いて考えをまとめていました。しかし、タブレット端末が導入されてからは、入力した「自分の考え」が全員にリアルタイムで共有されるとともに、仲間の考えもリアルタイムで共有できるため、これまでよりも相互に多様な考えを知ることができます。また、仲間の考えをより深く知るために、相手の話を聞いたり、意見を交換したりする「対話」が生まれはじめています。

なかなか手を挙げて発言しにくい子どもたちでも、多様な仲間の考えにふれながら、自らの考えも仲間に伝えることができますし、タブレット端末の中だけにとどまらず、実際に子どもたち同士に対話が生まれることで、自らの考えをより深くまとめていく学びにつながっていくのではないのでしょうか。

sign No.10

サイン
No.10

まだまだ発展途上

このような事例を見ると、まるでタブレット端末が万能なもののように見えるかもしれませんが。しかし、決してそうではなく、どのような使い方をしているか、高い頻度で使っているかも鍵となります。「令和六年度全国学力・学習状況調査」における「小学校五年生までに受けた授業で、ICT機器をどの程度使用したか」という質問で、「週に三回以上PC・タブレットなどのICT機器を使用した」と回答した富山市の児童の割合は六一・八%であり、全国における同回答の割合の五九・五%を上回ってはいますが、それでもまだ約六割であり、タブレット端末を使った学習はまだまだ発展途上です。

子どもたちがタブレット端末の有効な使い方をとおして学ぶことに興味を持ち、主体的に考えることで学習の幅はさらに広がるでしょう。

また、子どもだけでなく、先生も積極的にタブレット端末を使用し、授業にどう活かすかを模索することも指導力を高める上で重要です。

「令和の文房具」を使うことは目的ではなく、あくまでも子どもたちが未来を生き抜くための力を伸ばす手段の一つなのです。



グループで考え、アイデアを出し合う児童たち。

調べ学習も、タブレット端末で。

早い段階から可能性に触れる!



教えて！ いするぎ先生

—— 子どもの自立を支える関わりとは ——



石動 瑞代

富山市教育委員
富山短期大学幼児教育学科教授

イヤイヤ期、中間反抗期、そして思春期における反抗期

子育てにおいて、親子関係に少し緊張感がうまれる時期を反抗期と呼んでいます。「反抗」というのは親側の視点であり、子どもからすれば、自己のアイデンティティを確立するプロセスです。自我が芽生え、「ジブンデ!」の欲求が高まる2歳頃の『イヤイヤ期』、親に依存しながらも、友達との関係や仲間集団での「ジブン」を優先的に考えはじめる小学校中学年頃の『中間反抗期』、そして、思春期特有の心理的アンバランスさや批判的視点によって大人の価値観に反発心を抱く、中学生頃の『反抗期』。子どもの意識が社会に広がっていく中で、親という「社会的存在=小さな壁」とのやり取りをとおして、確かな自分づくりをしているのです。「うちの子には反抗期がない」という話も聞きますが、明らかな反抗的態度が少ないだけで、仲間との関係や価値観を優先したり、親の思いとは異なる行動や決定をしていたりする場合は多いと思います。ただ、子どもは着実に育とうとしているのですが、親のほうで、子どもの意見を受け入れすぎたり、仲間関係等に干渉しすぎたりすることで、育ちを妨げることがあります。発達節目には、必ず葛藤があるもの。その葛藤を親も一緒に乗り越えることが子育てだと考えてほしいと思います。

仲間集団の意味

仲間集団は子どもの精神・社会的発達に重要な環境です。共に過ごす中で、コミュニケーションや協調性、共感力や問題解決のためのスキルなど、多くのことを学びます。周囲との比較から時には劣等感をもちながらも、家庭での価値観を超えた、多様な考え方や行動に触れることで、自分らしさをつくっていきます。何より、悩みを共有し支えてくれる仲間存在は、心強い味方なのです。一方で、最近のいじめ報道等にもみられるように、同調性の高さや閉鎖性から、リスクが生まれやすい環境でもあります。その不安から、仲間関係に干渉したり、友達のような親子関係(フラットな関係)をめざしたりするのも、わからないではありません。しかし、親の役割は、発達にふさわしい距離を取って見守り、必要があれば、子どもの行動を制限する壁になったり、安全な場所に導く大きな存在になったりすることです。学校の先生方による「仲間集団を適切に育む力」を信じ、反抗期という節目を、親子の成長の時期として、前向きに過ごしていただけるよう、願っています。

学 校 再 編 新 聞

老田、古沢、池多小 3校で交流



3校交流会の様子を見学する委員

老田小学校、古沢小学校、池多小学校の1・3年生116人は11月14日、老田小で合同の交流会を開き、あいさつじゃんけんやフラフープくぐりなどのゲームをとおして親睦を深めた。

交流会は、学校の枠を超えて、子どもたち同士に仲良くなつてほしいという思いから今回初めて開催された。子どもたちは「仲良

「友達が増えた」と笑顔

く遊んで楽しかった」「違う小学校の仲間と遊べて嬉しかったなどと笑顔を見せていた。

この日は、古沢小学校のあり方協議会の委員7人と池多小学校のあり方協議会の委員7人も訪れ、再編の方向性を検討するため、子どもたちの様子を見学した。交流会の様子や学校施設の見学も行つた。



◀ YouTube やってます!

signへのご意見・ご感想は
こちらからお願いいたします ▶

